第3章

体験談

第３章　体験談

第１節　県民の地震体験談

体験談１

男性、40歳代、会見町
家族構成：本人・妻・子供（3人）・母の6人
住　　居：木造2階建／半壊

年寄りだけの町を襲った大地震、みんな無事でよかった！

●石垣が波打ち、すべて崩れている！

仕事で遅い昼食を家で取っていたときに、グラッと急に家全体が揺れて、茶たんすや食器棚の上の物が宙を舞って落ち、ガラスは大きな音を立てて全て割れました。

傍にいた母親を抱えるように安全な部屋へ移動させ、上から私が覆い被さりテーブルの下にしゃがみ、揺れが収まるまで身体に力をグッと入れて石のように固まってジッとしていました。

いつまでも家の中にいてもいけないと思い、外に出ようとしましたが、母は「外に出ると何が落ちてくるか分からないので出ない」と出ようとしませんでした。しかし、家が崩れてしまってはどうにもならないと思い「とり合えず広い所まで出よう」と、大急ぎで大通りまで出ました。

外に出てみると、蔵のひさしや壁、瓦が落ちてあちこちに散在し、ふと見ると、下の家の石垣（ブロック）が全部崩れ落ち、近くの家の石垣も波を打って崩れ落ち、異様な光景でした。

●昼間は年寄りだけの町

会見町は兼業農家が多く、昼間は若い者は米子市近郊に出てしまっていますし、定年退職をしても元気な人は再就職をしています。ですから、いざ何かあった時に残っているのは年寄りばかりなのです。年寄りの人を災害の時に、誰がどのように見てあげるかという事がいつも頭にありました。当部落区長も出先から即刻帰ってこられたので、一緒になって各家の人たちに声をかけて廻りました。また、同時に公民館を開放して地元にいた若い人が手分けをして生活保護を受けている家庭などをみて廻りました。

この地震の余震が結構続き、どのような状況でもすぐ飛んで出られるように、寝る時も普段の服に靴下も履いて寝ていました。隣家でも、余震が続くものだから、近くの公園にテントを張って過ごしたり、軽トラックの後ろにシートをつけて、その中に寝ている人もいました。

●水の大切さが・・・

一番困ったのは、水道の水が茶褐色になってしまい飲めなくなったことです。ありがたい事に、自衛隊の給水車や米子市が水を汲んで持って来てくれたり、災害の少ない近隣の市町村から水を貰ったりして、凌ぎました。

水はポリタンクで1日３回位の給水。食事は

教訓　伝えたいこと

●自主防衛意識の高揚として、初動と地震の対処方法を家族に周知徹底すること。（米子市、男性、70代）
●地震がいつ来てもいいように、備えを偏りなくやろうと思う。（米子市、女性、50代）
●各市町村に震災の写真・資料等を残しておいて欲しい。（米子市、男性、50代）
●自分の身は自分で守ることと隣、近所と情報交換すべし。（米子市、女性、50代）
●日本列島は地震列島で、どこでも起こりうること。備えは、自分でできることはできる限りやっておくこと。（米子市、女性、50代）

貰った水で賄いましたが、風呂には到底入れません。皆生温泉などの協力により無料で入浴させてもらいました。初めの内は温泉に入れてよかったのですが、通っているうちに帰るのが遅くなるので、最後は、多少濁った水や貰った水を入れて沸かして風呂に使っていました。

田んぼの水不足などは経験した事はありますが、飲み水がないという事は本当に大変な事だと思いました。水のありがたさを痛感しました。

●重要な余震情報がテレビに流れない

一番気になる情報は余震の情報だったのですが、なぜか会見町だけがテレビの余震情報として流れないのです。地震があるたびに、テレビにかじりついて「いまの余震は、どれくらいだ？どこが一番大きい？」と、目を白黒して見るのですが全く流れないのです。

各市町村の震度計のデータは、気象庁に行くものと科学技術庁に行くものがあり、気象庁にデータが行くものはテレビに表示されるそうです。会見町に設置した震度計が科学技術庁にデータが行く為に、テレビで地震情報が流れなかったのです。地震情報がテレビに流れないので、町長にもいろいろな町民から様々な問い合わせがあり、急遽、町内に震度計を設置するようになったようです。

●納屋も住宅再建支援の対象に

今回の住宅再建支援制度には、住んでいる家屋でないと対象にならなく、土蔵や納屋などには全く補助的支援は出ません。全部自己負担をして修繕しなければいけません。

会見町では、溝口町のように一律何万円ということはありませんでしたが、負担額をかなり軽減していただき、援助的なものはしていただけるようにはなっています。しかし、町では必要ないものでも、農業を中心にしている所ですと、一つの小屋や物を入れる農業車庫や作業所がどうしても必要になります。農業に必要な物として、普通のサラリーマンでは必要ない部分での建物・機具を持っているので、生活に必要という部分で、今後何らかの支援等を考えてほしいと思います。

●悪質業者に困った

震災後に困ったのは、県外から来る悪質業者です。我が家も昼間に年寄りが留守番をしていると、屋根にビニールシートを掛けているのを見て、1日に3～4人も建築業者がやってきました。見積りを頼むとあまりにも法外な見積りで、断ろうとすると、嫌な顔をして、『見積りまでしたんだから』と、今度は強制的に契約を交わそうとするのです。

今後は役場や行政を通さなければ、災害時の業者は受け付けないというような窓口を作り、信用できる業者の斡旋が必要なのではないでしょうか。行政からの許可書みたいなものを作れば、みなさんが安心して話、契約が出来ると思います。解体業者にしても同じだと思います。

●この記録を教訓として残すべき

この体験は、1年経ち、2年経ち、人間は誰でも忘れていきます。ですから、1年後の10月6日に「鳥取県西部地震」の1年を振り返り、“あなたの家庭にはこういうような緊急時の準備は出来ていますか？”という事を常に投げかけていかなければ、いざという時には何もできないと思います。

その為にも、記録・資料を残し、全戸に資料配布を出来たらいいと思います。自然災害についての勉強・研修や訓練が必要ではないでしょうか。火災は、年に1回程、消火器の使い方や入れ替え等の訓練的なものをするのですが、地震などの天災はまったく訓練も何もしていません。真剣に訓練が必要だと感じました。

災害を防ぐことができない我々ですが、老人の多いこの町で、災害時にただ声をかけるだけでもいいので、部落の人に町内ボランティア制度導入の提案を投げかけています。まだ具体的なものではありませんが、地元にいる人が災害時に、老人宅などを優先的に見て廻るような体制にしたいと話しています。

●宅地の地盤について調べておくこと。（米子市、男性、70代）

●建物を建てる時は、地盤をしっかりと調査し、土台をしっかりすること。（米子市、女性、60代）

●家具の固定は絶対に必要。仏壇も転倒したので居間の家具類は、特に気を付けること。（米子市、男性、70代）

●家屋の建築は、平屋建築で軽量な構造がよいと思います。（米子市、男性、60代）

●被災者住宅再建制度・被災者生活再建制度の充実について検討をお願いします。（米子市、男性、70代）

体験談２

西伯町、女性、70歳代
家族構成：本人・夫の2人
住居：木造平屋建／半壊

病弱な夫を気遣い自転車で帰る途中に道路の亀裂で転倒

●道の亀裂にはまり、自転車ごと転倒

稲こきのお手伝いに行った田んぼの中で地震に遭いました。ザワザワッと稲穂が揺れだし、地面の奥深くからゴーという地鳴りが響きはじめ、ふと山を見ると山全体が大きく波打っているではありませんか。家に被害があってはいけないと思い、主人も体の調子がよくないので、心配になり急いであぜ道を自転車で帰ったのです。

途中、道路に大きな亀裂が入っていました。その亀裂に自転車ごとはまり込み、顔を打ち、口の周辺を数針縫うほどのケガをし、血だらけになりながら家に向かいました。

●被害の状況は

家に帰ってみると炊事場が滅茶苦茶になっていました。戸は落ち、サッシ、障子、仏壇が全て倒れていたのです。座敷も陥没しており、たくさんの亀裂が出来、本当にすごい状態でした。

水道管が破裂し、水が使えないために10日間位、嫁いだ娘の所に避難していました。傷の手当てをしながら、昼間に家に帰り片付けをする毎日が続きました。

水道が使えないのは大変困りました。地震前は山水があり、井戸に溜まった水を汲み上げて使っていましたが、今回の地震で水が出なくなってしまいました。

親戚中が片付けを手伝いにやってきてくれましたが、なかなか思うように片付きませんでした。瓦も落ち、便所の壁も落ち、風呂も段差が出来て使えません。電気は大丈夫でした。それでも余震で家が倒壊するのではないかと心配で、公民館や避難所での炊き出しにいかせてもらいました。本当に助かりました。

家も斜めになった為に全部建具も削り、隙間がないようにしてもらいましたが、修繕するまではふすまや障子を閉めていてもスースー風が入り、心もすさぶような日々が続きました。

しかし、唯一「助かったなぁ」と思ったのは、修繕の費用として高齢者の家庭に出る補助が10万円位出たことと、農協の建物共済から90万円程出たことでした。

大体の人が入るのは火災保険ですから、地震保険は余程の人でないと考えないと思います。そのうえ、今まで全ての建物に入っていたのですが、２年程前から各建物毎に入らないといけないと言われ、一部の契約に変えたばかりでした。そのため一部しか出ませんでした。

●鳥取大震災の体験が

主人は、鳥取大震災を体験しています。その為か、今回は寝ていた時に地震が来たのですが、鳥取大震災の体験が遭ったので大騒ぎしなくても収まると思い、布団をかぶってゆうゆうと寝ていたそうです。けれども、待つということは長いものでいくら待っても揺れが止まらないので不安に思い、やや揺れが収まったので外に出ると、屋根の瓦が庭中に落ち、ブロック塀がバタッと全て倒れていたそうです。ただ、昔と違い、建物の強度など改善されているはずなのに、こんなひどい状況になる自然の脅威にただ、ただ恐怖するばかりです。二度とこんな

●被害が大きいと虚脱状態となるが、一人で悩まず、遠慮せず相談しながら解決していくことが必要である。（米子市、男性、60代）
●家具等の転落防止の処置を普段からやっておく必要を感じた。（米子市、女性、60代）
●日本列島どこでも数十年に一度は、大地震が発生するものといつも心構えをしておくこと。（米子市、男性、60代）
●地震発生位置により、建物の揺れの方向が決まり、その方向によって建物の揺れの強さが違ってくることが分かった。（米子市、男性、60代）
●住民レベルで、家屋倒壊等で生き埋めになった時、車のジャッキを利用するなど身近な知恵を集め、訓練するこ

体験はしたくありません。

●補助金制度に対する不満

瓦の補修をするのですが、屋根だけで100万円の見積りになりました。

補助金も母屋のような住居は出ますが、離れのように住んでいないところは全然出ません。私のところは全部自己負担になってしまいます。更に土砂崩れの工事にも40万円ほど自己負担しなければなりません。その他にも、200万円かかったうちの50万円負担しました。

実際に座敷に入れるように襖や壁などを修繕しようと思ったら、もっとたくさんの費用がかかります。ですから、とりあえず雨が漏らないように屋根だけ直しておこうかと思っています。

同じ部落内でも地震災害の山崩れの工事をしているのですが、全部無料です。しかし、我が家の山だけは個人負担が必要です。

誰の山であっても、危険区域で危険な状況なのです。ですから、役場に相談しています。

新聞やテレビが鳥取県は災害の公の負担を手早くやったと言われていますが、現実はそのようにはいきません。せめて公共のものに近い道路が寸断した場合などには補助金が出て欲しいと思います。

義援金については町からは20,000円位、県からは50,000円位頂きました。大変ありがたいことです。

●震災後は・・・

もし事前に地震がくることが分かっていたらそれなりに用心するのですが、全く予想も準備もしていませんでした。

今回、火事がなかったことは不幸中の幸いだと思います。もし発生でもしていれば、まだ地震のかたがついていないかもしれません。

まさか大きい地震は来ないだろうと言う考えはあっても、余震はいまだに気が気ではありません。

広報として地震の状況や道路や避難所の使用状況の放送があったようですが、家を空けて留守にしていたので、実際にはあまり聞いていません。ですから、「そろそろ家に帰らないと何も情報がわからないなぁ」と話をしていました。

震災当日に区長さんが見て回っておられるようです。後に「あなたのところはすごかったねえ」と言っておられました。

ボランティアの支援について町の方から「どうですか。派遣しましょうか」と言われ、お願いして来て頂きました。一人ではなかなかブロックの片付けはできませんので、庭のブロックの片付けを手伝ってもらい軽トラックで運んでもらい大変助かりました。男手が必要な現状な中、主人が病弱で大変困っておりましたが、ボランティアの方々に手伝っていただいたことは、本当に心強く、感謝しています。

●地震を体験して思うこと

この度の地震が昼間の発生でよかったと思います。もし夜にでも地震が起きていたら大変だと思います。家の中で動こうと思っても動くことができにくいからです。ですから、一番大切なのは、懐中電灯と水です。他の事はなんとかしのげると思いますが、水はそういう訳にいきませんから準備しておかなければいけないと思いました。水は特に大事なことだと思います。

他には、当座として、多少のお金も必要になりますので、鞄等に懐中電灯やお金や少し食べ物等を入れておくことも必要だと思います。

地震を体験することによって、予備知識的な事が出来、初めていろいろな事に気がつくのだと思います。現実にいくら騒いでいてもあれだけ揺れていると、動こうにも動くことができないのです。ですから、何も出来なくても仕方がありません。もう起こってしまったことは仕方のないことですが、早く以前の形に復興でき、以前のような生活がしたいですね。

と。（米子市、男性、40代）

●家を建てる場合には地質の調査をすること。耐震構造の建築をすること。（米子市、男性、70代）

●火元の注意、絶対に火災を起さないこと。皆で助け合うこと。（米子市、女性、60代）

●ガラスコップ・皿・食器等の入った戸棚は、前開きの物は注意して前の方へ開かないように簡単な鍵掛け道具を付けること。（米子市、男性）

●常日頃より防災対策に心掛けること。（米子市、男性、70代）

体験談３

西伯町、男性、70歳代
家族構成：本人・妻・若夫婦・孫３人の７人
住居：木造２階建／全壊

家の亀裂が余震のたびに大きくなり、いつ壊れるか心配な日々

●家の中がまるでゴミ捨て場の様に

家内と二人で田んぼに稲刈りに出て、一束刈った時に地震に遭いました。稲がザワザワっという感じで、グラグラと来て、立っているのもやっとでした。

田んぼの隣りのパチンコ店の二階から女の人が「えらいことだ！」と言いながら、凄い顔して手すりにさばって下りて来られました。田んぼの中にいたことで、私も家内も被害がどうこうということはありませんでしたが、振り返ると向こうの家から煙が立ち昇っていたので火事だと思い、とにかく家に帰って見なければいけないということで、少し揺れが和らいだ時に軽トラックに乗って帰って来ました。

その煙は土蔵が倒れ、隣家の離れを押し潰した土煙でした。その横を通ると石垣は崩れ、上にあった建物は見えなくなっており、煙が出ている下の建物は上の建物に押し潰されて土煙が上がっていました。その土煙は一瞬のことではなく、煙を見つけて田んぼから、そこを通る時まで収まらず立ち昇っていました。我が家は、どうにか倒壊することはありませんでしたが、家の中では何もかもがひっくり返っていました。棚に乗せていた物はすべて落ちているし、ガラス等がかなり割れて棚の中でひっくり返って壊れたり、乗せている瓶はほとんど壊れました。それから、一番手間がかかったのは、前側に戸がない５～６段ぐらいの高さの本棚が倒れていたことです。戦中・戦後のパンフレットなどが散乱してゴミ捨て場の様になってしまい、10日間ほど手がつけられない状況でした。

●何十mも飛ばされた燈篭

地震については予測しておらず、前兆もなく、全く気が付きませんでした。揺れだけでなく、音がかなりあった様に思います。また、その後の余震にも「ドドドドドーン」という音がずっとありました。震度5弱の余震が１回あり、家の中にいるのが心配でした。仏壇は神棚などがあり、ちょっと幅があったので倒れませんでした。

それから、山の麓にあるお墓の石塔が倒れたというだけではなく、燈篭などは何十mも先に転がって、下から泥が盛り上がるような感じだった様です。うちの左右の家のラインの被害がひどく、そこに地震のラインがあったようです。この西伯町はケガはあまりなかったようです。地震後、すぐ若夫婦が仕事場から帰って来ました。

●不安な車中の眠れない夜

何でも棚の上に乗せており防災対策などは全くしておりませんでした。

町の有線放送が絶えず入っておりました。町がすぐ手を打ち、その日の午後中頃過ぎには、その晩の避難場所なども指定して各校区で１～２ヶ所の避難場所ができておりました。それから、炊き出しもやっていました。西伯町役場の方から、当日の昼過ぎに「夜の避難場所は○○で、炊き出しもやっています」という有線放送がありました。

●地区単位で訓練をしておくと、家族構成もある程度把握できるので、緊急の場合役に立つと思う。（米子市、女性、50代）
●災害復興のための、国・県などの支援がどんなに大きな力となったかを教育や地域社会で活かしたいものと思う。（米子市、男性、70代）
●現在もガスとストーブを必ず切ることにしています。自分自身が本当に気を付けるようになり、今後の良い教訓となりました。（米子市、男性、60代）
●家族が現在いる場所が常に明確であることが大切である。（米子市、男性、60代）
●日頃から他人事でないと思い、防災について考えることが

家の中で寝ることは出来ない為に、どこかで夜を明かさなければいけないという気持ちでいました。保育所も避難場所になっていましたが、私たち夫婦と孫は交流センター。若夫婦は残って自動車の中で寝たようです。

あくる日の晩からこの辺りの人も、余震による二次災害の恐怖と家屋の崩壊の為に自動車の中で２～３日夜を過したようです。

小屋の屋根は、家にあったものや買ってきたシートで代用しました。町からいただいた大きなシートは、これ以上、放置しておくと崩れてしまうお墓のほうに使いました。

●火事がなくて良かった

地震のあったときはちょうど、食事が終わった時間帯でしたから火の気がなくて良かったなと思いました。火が出たら大変なことになっておりました。また、人に被害がなかったことと建物が倒壊しなかったということで、今はこうして笑い話にはなっております。とにかく、ケガや火事がなかったことが一番です。

●安全な避難施設がほしい

交流センターには町内からかなり来ておられましたが、大きな建物だと言っても屋根が付いているものなので不安が一晩中ありました。地震の時と火災の時とは全く違います。私個人の感じですと一番安心出来る避難場所、倒れようが何しようが心配ないという建物が近くにあればと思います。ビニールハウスやテントのような倒れても大丈夫という安全性のものがあればいいなと思います。家の中にいて倒れてきた場合、屋根の重さというのがあります。それから、地震よりも余震の方が恐かったです。塀や家の傾きなど、最初は「大したことなかったな」と言っていたのですが、１日に何十回も余震があり、それが10日経ち、20日経ち、１ヶ月経ちしているうちに段々と広がっていきました。壁も最初は割れ目程度でしたが、いつ壊れてもおかしくないぐらいになってしまいました。順番が廻ってこないので、母屋の瓦は修復が、まだ済んでおりません。修理できないままに月日だけが過ぎてしまい大変困っています。

●上に物を置くと危ない

高い所に置いていた物は全て落ちていましたので、壊れるような物はなるべく上に置かないようにすること。それから、軽い物はひっくり返らないように柱などに留めておいた方が良いと思います。（妻談：仏さんも仏さんにお断りして机の下に置かせて頂きました。）

また、懐中電灯は絶えず、どの部屋にも置いておかなければいけないなと思いました。

大切だと思った。（米子市、男性、40代）

●外出する時、鍵をするが地震があった時にそれが裏目に出た。（米子市、男性、60代）

●地震の時は、慌てないで落ち着いて、正確な情報を入手して行動すること。常日頃の訓練も大切だと思った。（米子市、女性、50代）

●食器棚・本箱等は引き戸が有効であった。また、上部を固定しておくこと。（米子市、男性、70代）

●地震の時は、とっさのことでなかなか動けるものではない。余震が何回か続くうちに被害がどんどん広がっていく。（米子市、男性、50代）

体験談4

西伯町、女性、40歳代
家族構成：本人・母の2人
住居：木造平屋建／全壊

一人残した老母を案じ、通行止めを振り切り帰宅

●地震発生時

当時、私は米子市内の職場で昼休憩中で、座って話をしていました。最初ガタガタしたと思ったら、今度はものすごい揺れが何度もあり、座っていられないような状態でした。事務所では、本箱などが倒れたりして慌てました。

私は給食係なのですが、いろいろなものが倒れてきて現場は凄かったです。揺れがおさまったと思えばまた何度も揺れて、落ち着いていられなく怖かったです。その後も余震が何度も起きましたが、本当に地が動く感じの揺れでした。揺れの時間が凄く長い時間に感じました。休憩時間が終わった後も1～2時間くらい同じような余震がきていました。

家に一人で残している老いた母が心配になり、職場の公衆電話から電話をするとすぐ通じ、安心しましたが、それでもいち早く帰らなくてはと思い、家路に向かいました。帰る途中の家のかなり手前で「通行止めだ。車は危険だ」と道路警備の人に言われましたが、母のことが心配で車を置いてでも絶対帰らなければいけないという気持ちがあったので、制止を振り切って急いで家に向かいました。実際は通れたのですが、橋と道との間に段差が20センチもできており、地割れもしていました。

●家は25度の傾き、全壊の証明

帰ってみると、3段ほど積み上げていたブロック塀が一部を除いてすべて倒れていました。家屋は古いのに余計にがたがきてしまい、家の床も一部落ちてしまいました。風呂場も全壊し、ドンと陥没した状態になっていました。また、家の周辺を見ると、家屋裏も地割れができていました。

水は井戸水をポンプで汲み上げているのですが、震災後は長時間の間、黒い濁り水が出ていたのでずっと出したままにしていると、その日のうちに多少良くなりました。近所では水圧が下がり少量の水しか出ない所や、全く出ない所もあったようで近所の人が貰いに来られたりもしました。

家の中では、小さなテレビも倒れ、いろいろな物が倒れていました。障子も縦破れ状態になり、開け、閉めが出来ない状態でした。家自体がだいぶ傾いたようで、計測の結果、25度の傾きと言われました。少し離れた所にある、以前使っていた風呂場も破壊状態になり解体してもらいました。

罹災証明も、後ろの石垣が突出し、裏山が土砂崩れになり、家も傾いているので全壊の証明を出してもらいましたが、実際には何とか住んでいます。

全壊ということで資金が援助してもらえるので、本当は全部建て直したいのですが、経済的に力がないので必要な箇所だけ早急に直しました。

●防災準備は何も・・・

以前から地鳴りや地震が何回もあり、「大きな地震が来るかも知れないから気を付けよう」と近所の人と話をしていましたので、気持ち的には備えていた部分もありました。

●地震時には、屋根が最も弱いので瓦が落ちる可能性が大変大きいので、慌てて外に飛び出さないことが必要。（米子市、男性、60代）
●「災害は忘れた頃にやって来る」の言葉どおり普段から対策を考えておくことが必要であることを痛感した。（米子市、女性、70代）
●地震に強い家屋は木造である。しかし、地盤を強化しておく必要がある。（米子市、男性、60代）
●中国地方の活断層の地図には、新しく鳥取県西部を加えたものが必要だ。（米子市、男性、60代）
●自然災害の恐ろしさは、やはり日頃から知識としてとらえるべきだ思います。（米子市、女性、60代）

阪神・淡路大震災があった当時は、緊急用に持って出るものは何か揃え持っておかなければいけないなという気持ちはありました。しかし、特に地震対策をしていた訳ではありませんでした。現在は多少の防災グッスや缶詰類を非常持ち出し袋に用意しています。

●避難者には分からない震災情報

避難場所が体育館になっており、自主的に避難された方は2～3軒ありましたが、避難場所は事前には知りませんでした。また、地震に関する情報は、有線放送や町の宣伝カーで流されていたようです。しかし、有線を絶えず聞いていないと情報がつかみにくい。その上、我が家は、親戚の家に3日間避難していてまったく把握できませんでした。

●ありがたかったボランティア

今回、ボランティアの派遣がとても有効でした。倒れたブロックの片付けが、女ばかりでできないのでどうしようかと思い、役場に状況を説明・相談をした所、役場の方から「ボランティアを使ってください」と言われました。

申し込むと3日後くらいに来て、きれいに片付けてくれました。この事で、ボランティアはすごく有効でありがたく、今後、何かあったら活用しなければいけないと思いました。

●生活再建支援体制の要望

日常一番困るのは、生活用水です。例えば、トイレが使えない、風呂に入れない。家が半壊・全壊はもちろんですが、生活に密着した中でいえばお風呂とお手洗いは大きい問題です。仮設トイレの設置や、仮設入浴施設がすぐ対応できるようなシステムを作っていただきたいと思っています。

車の運転が出来る人ばかりでしたらいいのですが、田舎ですと年寄りばかりで無理です。銭湯や公衆トイレでもある場所ならばいいのですが、田舎はその様なものがないので、特に生活に密着した事を充実して頂き、対応していただく事は必要だと思います。

ガス・水道が使用できなくなった場合、西伯町自体が食糧品を備蓄しているかが問題です。備蓄がなければ飲食に困ります。特に、水は最低限必要で、水だけで数日は生きていけるということがあります。ですから、物資をすぐ配給できる体制は必要だと思います。日常から体制を考えて欲しいと思います。

●今後の課題として

この地震を、あまり大きな括りの中ではなく、小さいレベル（町・村・部落・班）で考えていかなければいけないと思います。例えば、ここの部落でこういう場合は、どういう連絡ルートで誰が一人のお年寄りを避難場所へ連れて行くかというようなことを、きちんと話し合わなければいけないと思います。そういうことができるかと言うことを話し合う事が理想的で良いと思います。この部落の今後の課題です。こういう地震があったので、災害はいつ起きるか分かりません。また来る可能性が無きにしも非ずだと思います。

雨が降ると裏山が気になります。町に相談したところ、自分の土地ならば自分の所で直してもらわないといけないということでした。町は危険箇所ということで、県に報告しておきますというだけで、「危険ですから直しましょう」とは言ってくれません。裏山の地質調査をするわけでもなく、ただ見に来られただけです。どこまで行政が対応してもらえるかが気になります。

●地震は予期できないので突然グラッと来ると慌てるから、平素から訓練して行動できるようにしておくべき。（米子市、女性、60代）
●身内に家屋の被害が多くあり、今後家を新築する場合は、耐震構造にすることを伝えたい。（米子市、男性、60代）
●この災害は他人事でない。自分の為に非常持ち出し袋は用意すること。（米子市、女性、70代）
●家の新築に関して、土台の強い地震に強い、また地形もよく調査して建てるべし。（米子市、男性、60代）
●災害時に限らず、日頃から地域の人が支えあうことが大切と思った。この気持ちを次の世代にも伝えたい。（米子市、男性、70代）

体験談５

西伯町、女性、60歳代
家族構成：本人・夫、他２人の４人
住居：鉄筋コンクリート造２階建／全壊

壁は崩れ、家中に亀裂が走る。年金生活者には厳しい新築の決断

●風もないのに波打つ稲穂

昼頃、田んぼに出て稲扱きをしていると、ガタガタしているので「おかしい」と思いエンジンをふかしたり、止めたりしていました。大きな地震だったかどうかは分かりませんでしたが、近くの家を見ると屋根瓦が落ちたり、田んぼの穂が風もないのに波打っていて、地面が“ダワンダワン”と上下動している感じがしました。家に帰って、部屋に入ってみると、本棚が倒れ、本が落ちて部屋に入れなかったり、水屋は揺れで戸が外れたり、開いたりして中身は出てしまっていました。重い水屋や冷蔵庫までが動いているようでした。

家は鉄筋で昭和46年に建築されたものです。家の表は何ともないようでしたが、裏に回ってみると壁が崩れ、家の内側の壁にもヒビが入っていました。ガラスの戸は割れて破片が飛び散っていました。まだ屋根替えをしていなかった裏の蔵は崩れてしまいましたが、あれだけの揺れにもかかわらず数年前に屋根の瓦を敷き直していたところは無事でした。

蔵は明治の初め頃に建てられたものなので古かったこともあり、近所を見回ってみるとどこも土蔵は崩れていたようです。玄関もガラスの破片などで上手く閉まりませんし、鍵もかかりませんでした。ガスの元栓は締めましたが、水道は閉めていなかった為、壁が割れてしまい洋間の絨毯が水浸しになってしまいました。外の壁は雨が降って壊れるといけないので、暗くなりますがシートを被せていました。後日、建築関係の方が「昔の鉄筋と比べればダメです」と言っておられました。鉄筋が全部に入っていなかった為に腰折れになって欠けていました。壁や洋間の亀裂を見て『危険指定』にされ、片付ける意欲もありません。

初めの２日間は保育園が避難所となりましたが、３日目からは保育園が再開する為、交流センターが避難所になりました。避難所に出る時にあれこれ包んでいる暇はありませんでしたが、「仏様と位牌もお連れしないといけない」と思い、風呂敷に包み持って出ました。車で行くつもりでしたが、夫は「避難所に行かない」と言うものですから仏様も車の中に入れっぱなしにしていました。夫は監視と警備も兼ねて家の前で車に寝泊りしていました。

●防犯を考え、夜の見回り

地震のどさくさに紛れて泥棒でも入るといけませんし、防犯警備を兼ねて時々部落を懐中電灯を持って回ったりしていました。回ってみますと、他にも車で寝ておられた方があったようです。２・３日は車で寝ましたが寝た気がしませんでした。もし、また揺れても一度にひっくり返ることはないだろうと思い、家に寝ました。夫は私たちが床の上で寝ている間も20日間くらい車で寝ました。

地震後２日目には公民館や墓地の被害の状況を見ました。墓地は、ほぼ100％全滅でした。場所

●神戸地震以来、非常持ち出し袋を用意していたが、いつの間にか忘れていた。もっと継続的に用意することが必要と思う。（米子市、女性、60代）
●日頃より自治会などで相互の連絡方法、避難方法、ライフラインの確保などの情報を住民に知らせておくことが大切だと思います。（米子市、女性、40代）
●今回を教訓として、公的支援の制度、災害ボランティア制度の確立を望む。（米子市、男性、40代）
●埋立地、海の近く、山の急斜面もダメ。その土地の長老に昔の災害についてよく話を聞いておくこと。（米子市、男性、60代）
●人命保護・生活再建・環境保全などの面で具体策を検討す

によっては被害の状況が大分違っていて、「庭のタイルが1枚落ちただけです」という家もありました。余震もずっと続きました。時々ドーンといってガタガタとして終わる余震が多かったです。

●区長として

地震の直後から有線放送がどんどん入って、各家庭に対する連絡や指導はされていたようです。夫は区長でしたので「どうしたらいいか」と考えました。相談する人もいませんし、どうしていいか分かりません。

まずは、班長さんを集めようと思ったのですが、皆さん勤務中で連絡が取れません。2、3軒の家の人が集まって慌てていました。老人の一人暮らしの家などのガスや水道の元栓などを見たり、来られた人に確認したりしました。幸い火災がありませんでしたので良かったです。火を使っている時なら大変だったと思います。

町からの連絡は、各家庭に対するものばかりで各区ごとに動くような指示は全くありませんでした。被害報告も「各家庭ごとにして下さい」ということでしたが、ある人が「区長さんがまとめて被害報告をしているところがある」と言うのでやってみることにしました。班長さんの家を回り、昼前に各班の状況を大まかに調べてもらうようにお願いしました。1班で19軒というところもありましたが勤め人の所は奥さんがちゃんと全部調べて、最後は8時過ぎに集まって、9時頃には役場に全部持って行くことができました。個人で報告した家もあったようですが、班でまとめて頂いてコピーの控えも取っています。

●『緊急マニュアル』が必要

行政の町民に対する指導で感じたことは、災害が発生した時、区長や班長、それに伴った人たちはどう動けばいいか分からないということです。大部分の人たちは、まず自分のことしか考えないと思います。区長としてどう対応すればいいのか普段から『緊急マニュアル』みたいなものがあればいいと思います。今回、県はポスターを配りましたが、そういったものを普段から予行練習しておいて当然ではないかと感じました。それから、「区長は何をしているんだ」という声が出てこないだろうかと思ったりしました。何かあれば、区長が町に報告するなど、そのように決めておけば区長もすぐに対応できると思います。

今まで、こんな災害がありませんでしたので、経験や体験がないとやはり無防備です。

●片山知事に感謝。でも・・・

片山知事の住宅資金300万円の決断には本当に感謝しています。しかし、無料で取り壊して頂いて300万円の建築費の補助を頂いても、家だけではなく周囲のものも修理しなければいけません。銀行から融資してもらおうと思っても少ししか貸してもらえませんし、返済も10年以内と期限が切ってあります。解体も急がないといけません。主人も私も年金生活者なので、なかなか決断がつかず、どうしたら良いのか迷っています。

べき。（米子市、男性、40代）

●毎年、年に一回程度は、防災を皆で考えて整備する必要がある。（米子市、男性、50代）

●ライフラインの確保の為には、施設や設備を耐震化をしていただきたいと思います。（米子市、男性、60代）

●今後、日頃から耐震に備えた構造をすべての点で考え、子供・孫たちに伝えていきたい。（米子市、男性、50代）

●慌てないこと。パニック状態が一番危険である。（米子市、女性、30代）

●自分の住んでいる地域では地震はもとより、どんな災害も大丈夫と思わぬこと。（米子市、男性、60代）

体験談6

江府町、男性、60歳代
家族構成：本人・妻の２人
住居：木造２階建／半壊

轟音と共に地鳴り、激しい横揺れ。家が軋み生きた心地がしなかった

●とっさに机の下に

午前中に山へキノコ採りに行き、遅くなり食事をして部屋で横になっていました。そうすると、前兆もなく轟音と共に地鳴りがして、ものすごい横揺れがきました。立つこともできないくらいでした。

家が軋み、大きな音を立て、天井が今にも落ちそうで、家が倒れるのではないかと思いました。とっさに机の下に潜りましたが、外に出る事は考えていませんでした。阪神大震災の事は新聞等で見ましたが、まさか鳥取に起こるとは思ってもいませんでした。ですから、避難場所も全然考えていなかったので、どこへ行けばいいのか分かりませんでした。

妻は、部屋で座ってテレビを見ていました。揺れの為に開きの戸棚の扉が開いて食器が落ちてきたので、中から食器が出てこないように扉を押さえていました。しかし、向きが良かったようで、食器棚も倒れませんでした。近所でも家具の置いてある向きによっては随分倒れていたようです。

実際に揺れていた正確な時間は短かったかも知れませんが、随分長く感じました。テーブルの下に隠れましたが、立つ事ができなかったので逃げる事もできませんでした。

もし、ガスを使っていても元栓を閉めるというような気が廻らなかったと思います。座り込み、潜り込むのがやっとで、火の元を見るような冷静さはとてもありません。

その日の寝泊りは自宅でしましたが、自宅の2階には怖くて上がれませんでした。いつ余震が来るか分からないので、とても怖かったです。屋根にも何日も上がってみる事ができませんでした。

●田んぼが地盤沈下

壁に亀裂が入ったり、張ってあった壁が剥がれしわだらけになり、だいぶん傷みました。この部落のほとんどの軒瓦が被害に遭いました。今も修復中です。

畑の勾配をつけるのに石垣を組んでいますが、その石垣が崩れました。10年程前に田んぼのほ場改良（小さい窪を２反窪に）をしましたが、そこの半分はそのままで、残りの半分は地盤沈下したような状態になっていました。

●公民館では・・・

震災後は、余震が怖くて避難場所になっている公民館に集まりました。
公民館には役場の防災無線があります（各家にはありません）が、調子が悪くてあまり情報が入りませんでした。

町役場の2階に放送室がありますが、集合場所に連絡が入る事を要望しましたが、係りの人も避難したらしいとのことでした。このような状況の中では、いろいろな情報が定期的に欲しいと思います。それが頼りであり、心強いのです。情報を得るのは、テレビやラジオでも出来ますが、身近な情報はやはり町などの放送などが頼りになります。とても肝心な事なのです。

●家具の転倒防止対策を施すこと。屋根瓦は補強しておくこと。揺れを感じたら、テーブルなどの下に隠れ身を守る。（米子市、男性、70代）
●次の世代の人達に、今回体験したことを資料として残して貰いたい。（境港市、男性、60代）
●最近、建てられた家は被害はわずかで、耐震の配慮の有無がこの差を生じたのではと思う。（境港市、男性、70代）
●ライフラインが駄目になった時、困らないよう平素より心がけておくこと。（境港市、男性、70代）
●地震を始め、災害対策を考えたり、体験を話し合いながら危機意識を十分に持たねばならない。（境港市、男性、70代）

また、町や区長からの連絡事項がありますが、気が動転しているので聞き落としや聞き逃しがありました。有線や防災無線の充実が必要だと痛切に感じました。

●ビニールシートの配布について

ビニールシートの配布が役場からあり、大変助かりました。修復のための屋根屋や左官屋が少なくて、なかなか順番が回ってこないので未だに直らない所もあります。この辺りで最も多い被害は、屋根瓦、ガラス、壁などの被害です。一番有効的な援助はビニールシートでした。

●地震保険に入っていたお陰で

被害を受けた場合の費用は自己負担が1／3か1／4です。あとは、県と町の修繕費が出る事になりました。申請をして現状を撮影して、工事が済んでからも撮影をして、領収書を町役場の総務課に提出します。このような支援制度は非常に助かりました。共済組合（農業共済と建物共済）が長屋の方は対象が火災だけでしたので全然出ませんでしたが、母屋の方は農業共済に入っていましたので、入っていて本当に良かったです。これからは、必ず共済に入っておかないといけないと思いました。

農業共済は、係りの方が審査・調査して被害見積りをして割合早くに出ました。修繕に掛かる金額が大きいだけにとても大助かりでした。県や市町村などで補助金が出ても、到底足りませんから、その分を補足するような形で建物共済から出ました。

人は欲なもので、大した被害がなければ家が壊れなければ良かったと思うが、人が亡くなれば家どころの騒ぎではなくなるのですが・・・。

●いま思うこと

もし家が倒壊したら、家の中にいる者はどうしようもありません。万が悪ければ亡くなったり、ケガをしてしまいます。今回はこのような揺れで済みましたが、状況が違えば考えられる事です。

地盤が固い所はいいのですが、被害に遭っている所は地盤が緩く、母屋は良かったが離れは駄目だったり、風呂場が沈んだりしています。

家の柱も年輪のつんだ太い物を使わないといけないと思います。一階よりも二階の方が振り子のように余計に揺れ、壁がほとんどはがれました。

部落の方で時々、消防訓練をしますが、火災地震のこともあるので防災訓練を住民の間に徹底することが大事だと思います。

いつ阪神・淡路大震災ほどの震災が来るか判りませんから、あのような記録を勉強して行政も個人も対策を練っておかなければいけないと思います。いろいろな教訓の本などがあるので、震災の状況から復興の記録をしっかり勉強して、知恵を出し合って対策をしておかなければいけないと思います。

●生活道の確保の重要性

今回の震災も状況が悪ければ、火災の心配がありました。現在、陳情していますが現状では火災が起きても橋幅が狭くて、消防車がなかなか曲がれません。

近くを道路の181号線が通っていますが、地震の後に通行止めになりました。何年か前から町に対岸道路を陳情しています。この度のように通行止めになると毎日の食料品購入の車や通勤者の一般自動車も多くなります。大きな道路に幹線道路をつけ、生活道を2本は確保しておかないと今回のように一つストップになってしまったら、もう生活の移動のしようがありません。早急な生活道の確保が大切だと思います。

●救助活動等については、啓蒙の方法として文書に残していくべきだろう。（境港市、男性、60代）
●災害は忘れた頃にやってくるので、平素より防災意識をもつことが大切だ。（境港市、男性、60代）
●火災保険に入っていても、地震保険には入らなければと思いつつ、入っていなかった。（境港市、女性、50代）
●非常持ち出し袋・水・食糧の準備は必要だと感じた。（境港市、男性、60代）
●日頃からガス等の室内の元栓は止める癖をつけておく。（境港市、女性、50代）

体験談 7

日野町、男性、60歳代
家族構成：本人・妻・長男の3人
住居：木造平屋建／全壊

家を失い、自力で車庫を改造したトタン張りの仮住まいが今も続く

●地震発生時

稲刈りが手間取り、遅い食事を妻と摂ろうと胡座をかいて座り、箸を持った瞬間に地震が来ました。

最初は飛行機の音かと思うような「ゴー」という音がし、次は雷かと思いました。その瞬間に地震が来ました。

冷蔵庫が横にあったのですが、それが私の方に倒れて来ましたので手で支えました。電源コードが上のコンセントに差してあったので倒れずに済みましたが、もし電源コードが下のコンセントだったら真横から頭に落ちていたかもわかりません。

家内はすぐにガスの元栓を止め、私が冷蔵庫の下敷きになりかけたのを手伝って助けてくれました。

阪神・淡路大震災などをテレビでずっと見ていましたので、地震だからといってもそう恐くはなく「今度は自分の番だ」という気持ちがありました。

後方にある食器棚、戸棚などは全部倒れ、中のものは全部飛び出しました。ガラスなどは全部割れて散らばりました。ですから、足に刺さるので危なくて歩く事もできませんでした。

地震は、連続して波状的に来ました。これでもう地震は終わりかなと思った瞬間に、また強い揺れが「バーン」と来ましたがほんの一瞬でした。その時に、ガラスが割れて外に飛び散ってしまい、目の前から窓が消え、ガス爆発と同じような感じでした。地震は何回も経験していますので、「あ、地震だ」という感じであまり焦らずにじっとしていました。揺れが少しおさまり、「今だ」と思った時に外に出ました。大きな柿の木の下に入って様子を見ていると、また揺れが来て、台風の時と同じぐらい柿の木が揺れて倒れそうでした。震災後、柿の葉っぱが急に丸まってしまい、その後回復する間もなく秋が深まって葉が散ってしまいました。

●震災後の生活は

家屋は、土台が残ったまま家だけが完璧に半分前にずれて出ました。母屋は、ドアのブロックのボルトだけが残り後は全部前に出てきました。

このような被災状況でしたが、家の中には入れました。しかし、余震が続いていつ天井が落ちてくるか分からない危険な状態でしたので、そんな中で寝るわけにはいきません。

夜は前の畑にあるビニールハウスに布団を運んで、3人で雑魚寝をしていました。このまま住むところがないのでは困るので、トタン張りの車庫を改造して戸を付けて住んでいます。当時は、まだ気候が良かったのですが、その後だんだん寒くなり、色々と困りました。なにしろ、トタン1枚ですから、至る所にある隙間から温もった空気が全部逃げていき、冷たい隙間風が吹き込んでくるような状況でした。いくらストーブをつけても部

●日常の生活の中に防災意識を忘れないこと。また、地域住民の助け合いの気持ちを忘れないこと。（境港市、男性、50代）
●自主防災会の内容充実と持続的な訓練が大切です。（境港市、男性、50代）
●県や市の対応は、とても良かったと感謝いたしております。また、多くの方からご厚志戴き、とても助かりました。（境港市、男性）
●川・沼・海等の埋立造成地への建造物は、液状化被害対策が極めて重要であることが再認識された。（境港市、男性、60代）
●義援金をいただいた感謝を忘れないで、別の所で地震があ

屋の温度は上がらず、外気温とあまり変わらない状態ですから、真冬は体の芯まで冷えるような寒さでした。

風呂は、ポリの浴槽を親戚から世話してもらい、仮の風呂を露天風呂のように作りました。お湯はボイラーを外で繋いで青いビニールシートをかけ、水は自分で配管しました。

しかし、そのうちに霜が降るようになりだんだん気温が下がってきて、ホースなどが凍り、風呂は沸かせるけど水が入れられないという事になってしまいました。けれども、例年はたくさん降る雪も今年は珍しく降らなかったので良かったです。

食事も壊れた家の中に全然入れないという事ではなかったので食べる事が出来ました。それから2、3日後に毛布等の生活用品や食糧品等の救援物資が届くようになりました。町の方は早かったですが、この辺は少し遅かったです。

現在、新しい家を建てるために田んぼを宅地に転用するよう農業委員会に申請していますが、許可がおりてから家を建て、完成するまでにはかなり時間がかかり、震災後丸1年以上経過してからになると思います。

元の宅地に建てるならすぐに建ちますが、これだけの災害に遭うと、同じ場所に建てようという気にはなれません。

●もしもの時は・・・山へ逃げます

町に比べると、過疎地への救援活動が遅かったのではないかと感じました。ただ我々の良い事は、山に逃げられるという事です。

役場のほうから電話で「水は飲めますか」と聞かれた時などは、「自分は山の水を飲みます。それから逃げるのも山に逃げます」と答えました。「トイレなんかはどうですか」「どこでもできます」と言う感じです。生活レベルは低いですが、水やトイレ等の生活に一番大切なものには困りませんでした。

ボランティアの方や支援が町の方から来ましたが、地震から3、4日後位でしたでしょうか。その頃にはもう地震も終わり、皆が落ち着いた頃でした。

●地域的に見ると

この辺りは地震の揺れは一番強かったと思いますが、家の造り自体は強いと思います。風が強く、雪も降る所ですから、それに耐えられるだけの家が作ってあるので簡単には壊れません。町の方はものすごく壊れていましたから家の丈夫さを実感しました。もし、雪の積もっている所に上下に振動する地震が来ていたら、被害も大きく大変だったと思います。ちょうど工事用の重機が側で働いているような音と振動でした。

余震は震度4などの大きなものも含めてずっと続きました。その余震の間隔がどんどん長く弱くなって、今は落ち着きました。

子どもの頃からずっと通っている道があるのですが、今までにも山崩れが度々あり、いつも同じ所が崩れていました。この度の地震でも、昔から弱かった所が寸断されてしまいました。他にも道路がいまだに通れない所もあり、困っています。

●この地震を体験して

この地震は避けることができない、どうしようもない事でした。この大きさの地震なら、この程度で耐えられたけど、もっと大きな地震が来るかも知れません。今、良い家を建てたとしても、また壊れるかも知れません。地震から逃れると言うことは、まず不可能だと言う事を痛感しました。

地震は誰を恨むこともできません。ですから、これをきっかけに考え方を変え、皆が助け合うという事が一番大事だと思いました。今回の地震でつくづく、その事を実感しました。

ればお返ししたい。（西伯町、女性、50代）

●落ち着いて行動することが大切です。あとで考えると落ち着いていたつもりでも、随分うろたえていたようです。（西伯町、男性、60代）

●周囲、近所の人と争いのないよう言葉を慎んでいき大きい心を持ちたい。（西伯町、女性、60代）

●火の用心、水の確保、ガラス容器や重い物を上にあげない、屋根の下にはいないこと、避難は広場。（西伯町、男性、70代）

●公務員の方は大変だったと思いますが、お互いが被害者であるがために冷静、そして公平な態度で臨んで欲しい。（西伯町、男性）

体験談8

日野町、男性、70歳代
家族構成：本人・妻の２人
住居：木造２階建／全壊

資金の問題もあり、全壊の赤札でも修繕して住むしかない

●軽トラが飛び跳ねるほどの揺れ

ちょうど稲刈りも一段落して、天気も良いし、3km離れた所にある町の運動場で皆とゲートボールをしようと思い、休憩所で雑談をしておりました。ここで地震に遭いました。

これまで度々、地震はありましたが、こんなに大きな地震は初めてで“これはえらいことだ”と思い、すぐ外に出ました。すると停めていた軽トラがポンポンとトランポリンで飛び跳ねるように上下し、単車はバタバタと倒れていました。

ようやく揺れも収まったので、帰ろうとすると橋には段差が出来ており、国道に出ると大きな石が道路にゴロゴロと散在していました。また、大きな亀裂もでき、“これは大変だ”と思い、駐在所に駆け込み「通行止めしないと大変なことになっていますよ」と大声で伝え、家に帰って来ました。

家には家内が一人でおりましたので、それが一番心配でしたが、無事を確認できてホッと一息つき、ふと外を見回すと、蔵の白壁が全て落ち、庇がポーンと庭に吹っ飛んでいるではありませんか。縁側のガラス戸も全て庭に飛び出し、ガラスがメチャクチャに壊れていました。人間が中にいたら完全にケガをしていたでしょう。

母屋は屋根の瓦がずれたり、途中まで落ちたりして、いつ落ちるか分からないほどの状況で軒下を通ることができませんでした。

隣近所も私の家と同様に瓦がずれたり、壁に亀裂が入ったりして地震の物凄さを体感しました。

当日の夜は、家の中には寝ないでほとんどの人が自動車で朝を迎えたようです。町が仮設の住宅用としてテントを一つ張りましたが、とても部落の人は全部入りきれず、子供が入っているくらいでした。ここから1km半ぐらい離れた所に避難所がありましたが、緊急ですからなかなか出られません。公会堂もありましたが、避難場所になっていても建物の中に入るのは危ないと思い、ほとんどの人が自動車で一晩明かしたようであります。私も家を片付けていつでも出られるような服を着て、非常用の物（当座のお金など）を持って軽トラックで一晩だけ過ごしました。

●全壊と診断、建替えには資金が・・

自宅の診断で赤紙（全壊）だと分かり、一番感じたことは、資金の関係です。どうして直していこうかということが一番の心配でした。家の真ん中に亀裂が入り、土台に段差が出来たりして、家全体が斜めになって戸の開け閉めもできないようになっていました。何とか建具を削って開け閉めが出来るようにして頂きましたが、家中隙間だらけ。改築の必要があると言われても、右から左に建てられるという話にはなかなかなりません。ですから、完全に直すとなると相当なお金がかかる

●余震がある間に、罹災状況を判定することは早すぎると思う。余震の度に壁のヒビ割れが広がったりする。（西伯町、女性、60代）
●老いも若きもお互いに声を掛け合って、平素より人の心のつながり大切にしていきたいものです。（西伯町、女性、80代）
●今後の建物は耐震を考えること。高台（特に石垣）、裏が山等は住宅地にしない。（西伯町、男性、60代）
●いつ、何時でも突然に来る地震。科学の進歩、震度計も今以上に優れたものができることを期待しています。（西伯町）
●行政による防災に対する勉強会の開催を希望します。（西

そうなので、当分は壊れた所を直す程度で我慢しなくてはと思っております。

家の被害も大変でしたが、農家の収入源である田んぼの水路が全面的に壊れました。この辺りは今年一年休耕という悲しいことになってしまいました。

●素早い町のビニールシート配布

米子の方では、「地震は起こらない」と地震に対しての準備などは全く考えておりませんでしたから、非常時の持ち出し用の物は備えておりませんし、家具の固定もしていませんでした。

町からのビニールシートの配布など色々な支援、対策は早く、あくる日にはビニールシートが全家庭に届けられ「どうしてあんなに早く町長は手配できたのか」とびっくりしたぐらいです。町の対応は非常にテキパキとやって頂きまして、ありがたかったです。

あと、ここは防災無線が有線と外のスピーカーの両方あり、このような広報的な情報は防災無線で流されました。また、幹線道路などについての情報も防災無線で流れました。絶えず防災無線がなりっぱなしの状態で、色々な情報が流れておりました。

●林道が幹線道路として役立った

日野町は山間部を通っている大きな林道がついており、平素は皆が「いらないのではないか」と言っておりましたが、このような時は助かります。この林道がなければ、ほとんどここは通行止めになっておりました。やはり幹線道路は伏線というか、あっちがだめでもこっちというものがないと大変です。ようやく林道のありがたさが分かったところです。

●地震は他人事ではなかった

今後は、復旧は勿論して頂かなければいけませんが、他県や他市町村から支援、ボランティアなどに来て頂いたり、支援の物資を頂いたりして大変ありがたかったです。これまでは他の方で災害があってもテレビで観て“大変だな”くらいにしか思わず、どちらかというと他人事のような感覚でしたが、これからは災害が起きたら町をあげて支援すべきだと思います。

●今回はある意味一つの教訓だ

今回の地震で感じたことは、本棚やタンスをきちんと固定しておけば倒れてガラスが散ったりすることもなかったでしょうし、他に非常持ち出しぐらいは考えておいた方が良いと思います。

それから、このような災害時の避難場所、連絡先を家族で相談しておく必要があると思います。このような災害が起きると連絡が取れません。今は携帯電話があり、どこにいても連絡が取れますが、やはり避難場所などを平素から話し合っておく必要があると思います。

今回の地震でも学校に行っていて、地震で交通が不便になったとか、色々なことがありましたので、家族との連絡は方法を考えておく必要があると思います。

自分たちでできることはしないといけないと思います。一から十まで行政にというのは良くないと思います。昔から言いますが、“いつまでもあると思うな親と金”とか“ないと思うな運と災難”という言葉があります。正にこのことだと思います。

今回の地震はある意味、一つの教訓として得るものがあったのではないかと思います。

伯町、男性、60代）

●防災上、地質地図を作成していただき、自分の宅地及び所有する土地の実態を把握し無理な利用は避ける。（西伯町、男性）

●断層のズレの場所の表示など、ひと目で分かるような対応策が必要だと思います。（西伯町、女性、40代）

●防災対策を常に整えておくこと。（会見町、男性、70代）

●水源地が水を確保するために、隣接地の水源地確保、また他市町村との接続連携の方法を検討する必要がある。（会見町、男性、70代）

●生活自衛手段を、日々、身に付けておくことが大切。（会見町、男性、60代）

体験談９

日野町、男性、70歳代
家族構成：本人・妻の２人
住居：木造平屋建／半壊

断水で水の大切さが身にしみる。給水車がありがたい

●地震発生前後の状況

地震発生時は、仕事の建設現場に居ました。妻は家に居り、ちょうど昼休憩で休んでいました。妻は、大きな揺れの為に逃げようにも逃げられないので、家の大黒柱にしがみつき、家の中にいるのは一人なので“どうしようか”と不安な数分間を過ごしたようです。そして、地震の最中は、ガスのことなど全く頭になかったようで、「元栓を閉めて下さい」という町の防災無線からの有線放送があり、急いで元栓を閉めたそうです。

私が帰ったあとも、余震がひどく、家には入れない状態で、また次の地震がきて屋根が落ちてくる心配のない外の方が安全だと考え、その晩は軽トラックに妻と２人で寝ました。

今までも少しの揺れはありましたが、何かが壊れるという大地震は初めて体験しました。昭和18年の鳥取大震災の時も、このあたりは「石塔が倒れた」「傾いた」等の話はありましたが、それほどのひどい被害はありません。

●一番困ったのは・・・水

この度の地震で一番困ったことは、なんと言ってもトイレの水と飲料水と風呂等の生活用水です。自衛隊の方に1日に3回給水に来て頂き、非常に助かりました。近くに川は流れていますが、農薬などで汚いですから水がない事に一番不自由しました。このように止まってしまうと、お風呂はボイラーに亀裂が入っているかもしれないので沸かせませんし、ご飯すら炊けません。その状況を話すと娘がご飯を炊いて持って来てくれました。

震災５日後ぐらいから“ご飯を配る”と言われましたが、そうこうしているうちに亀裂の入っていた水道管の修理をして頂き、ガスも直り、ようやく生活ができるようになって安心しました。

また、家のトイレはひどく壊れ、全く使えません。この周辺には８個の簡易トイレがあり、どうにか日常生活に支障をきたすことはありませんでしたが、トイレにも苦労しました。

●家屋の修繕

我が家は半壊になり、黄紙の判定で、壁が全部落ち、あちらこちらは隙間だらけで、冷たい風がヒューヒューと家中を走り回り、あちこちから落ちてきた荷物で家の中は足の踏み場もないほどグチャグチャでした。ですから、今年の1月になってから修繕を始めました。玄関から下は全部替えました。まだ母屋はいいが、納屋や蔵の瓦がバラバラと山ほど落ち、蔵の壁も全て落ちてしまいました。

特に、物置とトイレの被害が大きく、どちらとも完全に崩壊してしまいました。地震前より家の土台は幾分傷んではおりましたが、この地震で手がつけられない状態になり、修繕という段階ではなくなってしまいましたので思い切って全部やり直してもらいました。

●20世紀最後の大震災を記録として残し、教育の場、地域活動の場で、再認識し合いながら自然災害を理解するべきである。（会見町、男性、40代）
●生活の為には“ライフライン”が必要です。そのためにも備蓄食糧、その他の防災用品は準備すべきと思います。（会見町、女性、50代）
●災害はいつ起きるか分からない。いつ起きても対処できるように住民と行政が一体となれるようにしたい。（会見町、男性、60代）
●震源地が近くで小規模の地震が数年（５～６年）にわたり続いたように思います。（会見町、男性、40代）
●家を建てる時に「筋交い」を必ず入れておく、地盤は埋立

住宅再建支援として150万円の補助金を受けました。その他にトイレの集落排水の補助金で約90万円を日野町から補助していただき、そのお金でトイレの撤去をさせて頂きました。まだまだありますが、費用も伴うことなので、ゆっくりと直していこうと思っています。

●集落の被害状況

ほとんどの家が被害に遭っています。3戸は修繕にかからずに、解体して建て直されました。石塔は大小問わず全部倒れてしまいました。屋根は、きちんと見れば歪みがきているかもしれませんが、落ちるというところまでいっていません。この辺でもトタン屋根は被害が1番少なく、瓦は一番被害が多かったようです。

●ボランティアの援助はありがたい

防災の準備としては、家の中のどこにどのような物があるぐらいは大体分かっていますが、必需品を一括して「これを持ってすぐどこかに行く」という準備はしておりませんでした。しかし、今はかなり余震が続きますし、少しは準備をしています。

一番助かったのは、町の放送体制で、防災無線を付けて頂いていて良かったと思います。必要に応じてその都度連絡が入り、指示してくれました。

ボランティアの方にもお世話になりました。防災無線を通じて「ボランティアの希望があれば、町の方に申し込みなさい」と言われましたので、連絡してお願いしました。後片付けやこれ以上崩れないような補強とか、あらゆることを親切にボランティアの方はやって下さり、大変助かりました。

この集落には避難場所はありませんでした。近くに集会所がありますが、集会所も壊れており、学校も遠いのです。しかし、この辺は集落ですから近所の仲が良く、助け合いもありました。例えば、みなさんの家が断水の為にお風呂が使えなかったのですが、井戸水を使っておられる方が2軒ほどあり、そこにもらい風呂に行かれた方もあったようです。我が家は息子の所に行ったり、皆生温泉に行ったり、水が出始めてからは、鍋で湯を沸かし、風呂に貯めて入ったりしていました。

●危険度判定への疑問

この周辺の部落の危険度判定は、赤はほとんどありませんでした。我が家も危険度判定は黄色でしたが、家屋の危険度判定には色々な問題もあり、不公平がありはしないかとは思います。判定時間は10～15分ぐらいだったでしょうか。「それだけの時間で分かるのか？」と思いました。その1回の査定で決定してしまう大雑把な判定です。我が家も留守の間に玄関、車庫、蔵にも貼ってありました。「何だろう」と思い見ると『注意して入って下さい』と書いてありました。隣家の人は「そんな人が来るのなら、片付けずに待っている」と言って、そのまま待っておられたようです。外の方は見てもらえば分かりますが、なかなか全てをぱっと見ただけで判断するのは無理だと思います。

●地震を体験して

今は、今後このような災害があったらどうするかということより、今は壊れたところの修繕をするのが精一杯です。みなさんも、それを一通り直すまでは次は何をすれば良いかというところまで、なかなか考えていないと思います。「何かあればする」程度で具体的な所までまだ余裕がなく、その段階までいっていません。

有線で色々連絡して頂いた事、ボランティアの方と自衛隊の方には大変お世話になり親切にして下さった事、大変助かりました。

にしっかり大石を入れておくなど家の建て方に一考を要する。（岸本町、男性、60代）

●震災の直後には瓦の落下が激しいので、慌てて外に飛び出さないこと。（岸本町、男性、40代）

●日頃、いろいろな防災訓練に参加し、真剣に取り組むこと。本番では訓練だと思って落ち着いて行動すること。（岸本町、女性、40代）

●懐中電灯・ラジオの準備も怠りないように。（日吉津村、男性、60代）

●地震で教わった全ての教訓を他の人に伝えたい。（淀江町、男性、60代）

体験談10

日野町、女性、70歳代
家族構成：本人のみ
住居：木造２階建家屋／一部損壊

一人住まいの老女の私に、ご近所の方からの暖かい差し入れ

●保健婦さんとの電話中にグラッ

ベッドで寝ていたところ町の保健婦さんから電話があり、話をしておりましたらグラッときました。ハッと思いましたが年を取ると鈍くなるので、すぐにはピンと来ませんでした。電話の向こうで保健婦さんが何度も、名前を呼んでくれたので、私は机の下にもぐりながら「電話は持ってますよ」と言いました。そうしたところ、近くで工事をしていた工事現場の人が「おばあさん、早く出なさいよ。地震だぞ」と言いながら庭に飛び込んできました。それでハッと我に返り、「これは出なければいけないなと思いました。

鈍いのも良いものです。若さでパッと飛び出したら、何があるか分かりません。しかし、このまま出ていいものか。何か持ち出す物はないか。出ている間に何があるとも限らないから襖などはみんな開けておかなければ、入れないことになって困る。電気がなければどこにも動けないから電気も持たなければいけないなどいろんなことが頭を巡り、懐中電灯と現金と病院にかよう保険証など重要に思うものをリュックに入れて背負って外に出ました。

●ありがたかったおにぎりの差し入れ

外に出てみると、地震で生き埋めがあったらしく、みんなが生き埋めの救出の現場に心配で集まっておりました。「これは大変なことだ」とは思いましたが、好奇の目で見るのは気の毒だと思いじっとしておりました。すると、駐在さんが一番先に来て「おばあさん、建物の下や高い物（電信柱など）の下にはいないで下さいね」と声をかけて下さいました。とてもありがたかったです。

家から出た後は、道に座っておりました。他の人はバタバタされておりましたが、救急車や救命隊の救助の邪魔になると思ってジッと座っておりました。

その日の夜、隣りの人が夕方帰って来て「おばあさん、食べる物はありますか」と言ってみえ、「おにぎりを買っているので差し上げます」と言って、その夜とあくる日に食べれるほどのおにぎりを分けて下さいました。それまでは少し敬遠しておりましたが、その時「人は見かけなどで見てはいけないものだな」ということをしみじみと感じました。

●仏さんと一緒なら

地震当日の夜は、家の中で寝ましたが、天井から柱が一間置きに建っており、その下で耐えております。これが落ちたら、この家と仏さんと一緒だと心を決めましたら恐いことはありませんでした。「子供の所に３日居た」「４日居た」という話を後で人から聞きましたが、私はこの家におりました。このように心を決めると、よく眠れるようになりました。

青森にいる次男の子どもが従兄弟の家の者から「日野町は大変だぞ。早いことお婆さんに電話し

●非常持出し袋、備蓄食糧、医療品、防災用品等、置き場所を決めて誰でも持出せるようにまとめて袋に入れておく。（淀江町、男性）
●地域の防災訓練を家庭及び地域で日頃より行っていること。（淀江町、男性、40代）
●貴重品や重要書類は取り出しにくい所にしまいがちですので、取り出しやすい場所に保管すること。（名和町、女性、40代）
●子どもが大きくなってから親として、この地震の体験談を話してあげたいです。（日南町、女性、20代）
●災害は突然発生するものなので、常に非常時のことを頭の中に入れて生活しなければならない。（日南町、男性、60

ろ」と言って下さったそうで、「お婆さんのその声なら大丈夫だ。あとは何とでもなるから案じるなよ。体を大事にしろよ。携帯が繋がらないから公衆電話からやっとかけてるよ」と電話をかけてきました。それから、大阪に居る長男の子どもが、地震後、３週間、毎週金曜日の仕事を終えてから帰って来てくれました。このように、非常に力になってくれありがたかったです。

家に戻ってみると仏間の写真がみんな飛んでおり、位牌も飛んでいました。「また地震が来て位牌が壊れてはいけない」と思い下に並べておきましたが、幸いに位牌も壊れず、仏壇の方の破損はありませんでした。「これも朝晩お線香をあげた効果だろうか」と自信を持ちました。

●知らなかったビニールシートの配布

「一戸平均２枚ずつビニールシートを配布した」という話を聞きましたが、案内があったことに気がつきませんでした。

母屋は大丈夫でしたが、トイレの地盤がしっかりしていなくて被害がひどかったようです。そのため、いつ見えたか知りませんが役場の方が罹災証明書にハンコを押して送って下さいました。「いつ調べられたのですか」と聞くと、「外から見たら分かります」と言っておられました。瓦は意外と丈夫でした。「あまり、すぐに修繕しない方がいい」と息子も言うものですから、また余震が来ないとも限らないし、「その時はその時」と言って修繕しておりません。

●日ごろから元栓を締める癖を

お昼を過ぎた時間だったので火は使っておりません。それから、自分は年寄りですし、日頃から、安全に気を付けていたので火を使う度に元栓は切るようにしておりました。日頃の心掛けというのも大切なものだなと思いました。

●貯えはやっぱり大切

今回の地震で「貯えは必要だな」ということを痛感しました。皆さん「その日暮らせれば、あとは何とかなる」と楽天的なことをおっしゃいますが、それに同調できないこともありませんが、やはり少しでも貯えがあれば心に余裕を持つということにもつながり、強さにもなるものだということを現実に今回の地震で痛感しました。

●戦争体験と同じだった地震

アンケートには「もう疲れた。二度と経験したくない」と書いたような気がします。しかし、戦争を経験したことが大いに役立ちました。戦争より大きな被害は何もないですから。人並みだと割り切ったら、もう何ともなくなりました。あの時、食べようと思って口に入れても飲み込むことができませんでしたので、「この経験はどこかでしたな」と思い返してみると60年近く前にそれを経験していました。「あれだ。忘れかけていた」ということで、また新たに考え直すことができました。人並みということは良いことです。戦死は人並みではありませんでした。戦争がいい教訓になりました。

代）

●地震後の新聞を大切にしているので、孫達が知りたがるようになったら新聞を見せて話をしてやろうと思っています。（日南町、女性、60代）

●地震の断層が遠くても大きな地震がいつあるか分からないことを子供に伝えたい。（日南町、男性、70代）

●いつでも家族との連絡ができるようにすることが大切です。（日南町、男性、70代）

●天災はいつ発生するとも限らないので、絶えず心の準備をしておくべきである。（日野町、男性、60代）

●ボランティア活動等大変有難かった。（日野町、男性、60代）

体験談11

溝口町、女性、50歳代
家族構成：本人・夫・子供１人
住　　居：木造２階建／一部損壊

全戸５万円の町からの見舞金は助かりました

●家族全員の無事にホッ

地震発生時は、店にいました。昼食は普通ならたいてい1時か2時くらいになるのですが、その日はたまたま12時くらいに食べて、勤務先の店の中に立っていました。その時にグラグラと揺れ出したので、「あ、地震だ」と思っていたら、蛍光灯が揺れながらガチャンッと落ちてきたのです。すぐに、これは大きな地震だと思って、店のすぐ前の何もない広場に飛んで出ました。もう一回余震が来た後に、携帯電話を取りに入りました。携帯電話をみると主人から着信が入っていました。すぐに主人にかけ直すと、その時はまだかかりました。その後、子どもの勤めている所に電話をかけてみると、もう通じなくなっていました。でも、しばらくして電話が通じるようになって確認したところ、一応、家族全員が無事だったので、それだけでもよかったぁと思ったのです。

●家の周辺には屋根や壁が散在

（店のほうの被害は）上に置いていたものが落ちていたので、とりあえずそのまま店に土足で上がりました。その後、鍵やシャッターを閉め、電気のブレーカを下ろして、すぐ自宅に帰りました。店の周辺は少し瓦が落ちたくらいで、そんなに被害は大きくないと思っていました。自宅は店から車で5分くらいなのですが、自宅の近所は全部、屋根の瓦や蔵の壁が落ちていました。

余震はずっとあったのですが、靴を履いたまま台所のほうから家の中に上がってみると、冷蔵庫のドアや閉めて出たはずのサッシが開いていました。でも、割合揺れの方向がよかったのか、中のものが落ちていたのは洗面所ぐらいでした。

地面に亀裂の入っているところもあって「うわぁ、これはひどかったんだなぁ」と思いました。墓も全部倒れていました。

●非常食の買出しに大急ぎ

悪い天気が続いており、夜になって雨が降ったりしたら大変だと思っていました。すると近所の人が「○○さんが農協にビニールシートを買いに走っていったぞ」と言っておられました。それを聞き、我が家もすぐにビニールシートを買いに走りました。

近所の人も雨漏り対策にバタバタとしていました。電気がこなくなると冷蔵庫の中のものもだめになるので、農協から帰ってきた後、コンビニに行っておにぎりやパンなどを買い込んできました。電気のブレーカを下ろしたり、ガスの元栓を閉めたりしたのは買い物から帰ってきてからです。それから、クーラーバックを冷蔵庫の横に置いていたので、その中に買ってきたものをつめ、他に毛布、懐中電灯、タオルなど必要なものも一緒に車の中に入れました。その後、何も倒れてこないところに待機していました。

主人はたまたま仕事で被害のひどかった会見町にいたのですが、地面から地下水が噴き出していたそうです。溝口町も一晩中揺れていました。

●県町村等の対応は、最高とは言えないものの成功だったと思います。（日野町、男性、70代）
●こんな災害に、いつ遭遇するか分からないのが世の常で、それに対する心構えは必要である。（日野町、男性、70代）
●震災により3歳児でも「壊れた。家を直す、崖の修理」という言葉が口に出ているので心のケアが必要だと思う。（日野町）
●町全体で防災対策の強化と防災についての考え方などを真剣に取り組んでもらいたい。（日野町、男性、40代）
●携帯ラジオが一番早く情報が分かる。（日野町、男性、70代）
●家族と災害時の避難場所、連絡先を相談しておくことが必

●危険な公民館を避けて車に

一応、避難場所の公民館があるのですが、公民館の屋根や天井が落ちていて、余計怖かったので子どもと二人、毛布を持ち込んで車の中で過ごしました。

二日目は（また大きな地震が起こるかと思い）靴下を履いて服は着たまま、懐中電灯を枕元に置いて家の中で寝ました。

飲み水は幸いにも大丈夫でした。家の横には山から流れてくる、小さいけれどきれいな川があったので、手を洗うくらいならそれで十分でした。

●避難所にはバリアフリーが必要

私たちの避難場所の公民館に行くには階段があります。特別には問題はないのでしょうが、高齢化して車椅子を使うようになってくるとちょっときついかなぁと思います。これは高齢者だけでなく、障害者のためにも是非考えてあげないといけないと思います。

町の役場の人だけで町全体を見るのは人数的に大変だから、各部落で区長さんとか役員さんなど、そういった人と役場が密に連絡を取ってほしいです。また、地震は自然のことで誰にも予測できません。やっぱり火が怖いので常に火に気を付けるように、それが自然と癖になるようにすることが大切です。地震のあと、カセットコンロやボンベは常時切らさないようにしています。大事なもの(キャッシュも含めて)はちゃんと自分で分かるところに、すぐに持ち出せるようにしておくこと。防災袋がある家はいいと思います。自分で気が付いたものを入れておく。腐らないものや懐中電灯とかカットバンとかタオルとかを入れておいてもいいと思います。

避難所となっていた公民館では、ボランティアの方々が炊き出しをやっていましたが、お年寄りだけのところはいいけれど、それ以外の一般家庭の人も避難している訳だから、炊き出しなどをすることが本当にいいことなのかと思います。避難している人たちは自分達で考えて助け合うことが必要です。県や市町村に頼るだけではいけないと思います。

●助かった。全戸5万円見舞金

見舞金が町から5万円ずつ、全戸に出ました。その5万円で壊れた屋根が直せたという人も中にはあったようです。それだけでは足りない人もたくさんいたようですが、このような緊急時には、お金は必要なので、今回の町の対応は大変良かったと思います。

要と思います。（日野町、男性、70代）

●家を耐震化することや何年ごとに点検も必要だと思う。災害時に使える貯蓄は必要だとつくづく感じた。（日野町、男性、80代）

●自衛隊や災害ボランティアへの感謝の気持ちと、恩返しの方法を考えること。（日野町、男性、70代）

●集落の自治会・自治体の縦横へのつながりの再チェックを早急にして欲しい。（日野町、男性、60代）

●記録写真の展示、保存や毎年10月6日に災害の日とする行事（避難訓練等）を考えること。（日野町、男性、60代）

体験談12

米子市、男性、70歳代
家族構成：本人・妻の２人
住居：木造２階建家屋／一部損壊

ここ数年の揺れ対策の家具転倒防止ビスが役立った

●テーブルの下に潜る余裕さえなし

地震発生時は、玄関先で電話が終わり受話器を置いて歩き出した時でした。体が倒れないように両壁に手をついて支えるのがやっとでした。ガスや火の始末は使用していれば考えるかもしれませんが、今回の場合は全然頭にありませんでした。その場にしゃがみテーブルの下に潜る余裕さえありませんでした。

妻は足が悪い為、ベッドの側におり、身動きが取れない状態でした。揺れがおさまってから、家の中の損壊を確認し、少し片付けかけたのですが、その様な状況ではありませんでした。

●数年来の地震のお陰で

屋根瓦が前のお宅の所に落ちていました。家の周りを一周して近所も見て歩きましたが、他にもズレたり壊れている所もありました。

家の中は、ここ5～6年の間に西部地震の前触れのような地震がありましたので、ここ数年のうちに少しずつ家具は事前に転倒防止のビス止めをしてありました。ですから、家具等の壊れる心配はありませんでしたので、これもここ数年来の地震のお陰です。“家具止め”ということが、今回しておいてとてもよかった事だと思いました。その点だけは用心した甲斐があったと思います。

装飾品なども建物と一緒に揺れるという、遠心分離機にかかったような状態だったようで、多少の壊れで済みました。しかし、壊れ物を片付ける時にケガをしました。

片付けようと思っても、かなりの余震があった為、片付ける気が起きませんでした。

自宅裏で作業をする為に、水道だけでも使えるようにしてトイレが使えるようにしていたのですが、裏だった為に水道管が地下で割れているのに気が付かず、近所の人が漏れている音がすると教えてくれて判りました。ですから、２～３日の間水が出っ放しの状態でした。他にも、震災数日後に100ボルトの電線が何度かの地震の影響からか切断されており、隣家が停電しました。軒下の柱のアングルが折れており、モルタルも焦げていました。

●ビニールシートの配布でひと安心

我が家は知り合いの工務店が翌日には来てくれ、全部直してくれました。全般的に家屋の補修作業はかなりの時間がかかっているようです。我が家も外から見ると、随分ひび割れがあるので、いろいろな業者が、「直しましょうか」「いかがですか」と日参してきます。

なんと言っても、屋根の補修が間に合わないのが一番心配だったのですが、地震後、3、4日経ってから役所の人が3人くらいで「お宅はビニールシートはいりませんか」と持ってこられました。その後、大雨が降り「良かった」と思いました。ビニールシートの配布がなければ、家中雨漏りだらけで被害がひどかったと思います。本当に助かりました。

●日常生活に必要な物資は備えておきたい。家具は多く置かない。町との連絡は密にしたい。集落で助け合って連絡をしあう。（日野町、男性、60代）
●行政の指導があって本当に心強く、感謝の気持ちで一杯です。（日野町、男性、70代）
●日頃の防災対策（例えば家具の固定等）がやはり必要です。（日野町、女性、30代）
●復興体制を目指した行政側（県・町）の取り組みがすばらしく、この手厚い対策を全国的に伝えたい。（日野町、男性、60代）
●災害に備えて保険は掛けておくべきだ思います。（日野町、男性、70代）

●震災後、今、思う事は

あるイベントで起震車で揺れの体験をしました。その時は「これから起こる」という心の準備がありながら動くことができませんでした。ですから、実際に大地震が起きたら余計に動けないので、あまり役に立つとは思えません。しかし、今後の為には体験していて損ではないと思います。

我が家では消火器はありますが、古くなりどうやって始末をしようかと思っているくらいです。この度も建物の倒壊は心配したのですが、消火器の心配はしませんでした。中で燃えても、隣近所が少し離れているという気もあり、本当はこの様な事では駄目だとは思っているのですが・・・。今後は、消火器の心配もしなければいけないと思っています。

地震の後は、特別に備えるような事はしていませんが、落下物防止にヘルメット、または防災頭巾のような物が必要だと感じました。しかし、その時はそう思いましたが、「喉元過ぎれば熱さを忘れる」で今はかなり心が緩んできています。

これから家を建てる人は、基礎工事をしっかりしておかれたら良いと思います。基礎のできているお宅の中には今回でもびくともしていないお宅もあります。基礎がしっかりとできていない家では、大きな被害になっています。

●行政も被災者の立場で

震災後、市の方から避難場所の広報がありました。しかし、余裕のある時ならまだしも震災の時にはどこへ行こうにも、そんな余裕はありませんでした。

地震のあくる日に、自治会長と市の方が2人で見回りに来て、被災状況を写真に撮られたのですが、その事についての報告が無いのでどのように役に立ったのかと疑問に思います。行政の方で何らかの手を打ってくれるのだろうとは思うのですが、その後は一切届けが無いと補償してもらえないということです。この事に対して大変不満に思っています。市役所に行き罹災証明書を貰いましたが、「土台が壊れています」と言っても罹災証明書を発行してくれただけです。それに対し、見に来て調査するということがありませんでした。危険度判定の赤い札が張ってある家もあるので、調査に来られている家も中にはあるのでしょうが、それにも疑問が残ります。

義援金についても届けをすれば貰えるものなのか、誰が判断して義援金をくれるものなのかと思いました。そういうランク付けを誰がどのように行っているのかと思います。

診断士が来て歩かれたと言う話は近所で聞きました。「お宅も危険の認定を出しましょうか」と言われましたが、そうすると家を直さなければいけなくなります。いくら補助をしてもらっても費用は、その何倍も払わないといけないので断りました。この様なさまざまな制度（罹災証明・支援金・義援金・危険度判定等）の仕組みが、どの位住民にきちんと理解されているのでしょうか。

行政も被災者の立場で考えて欲しいのです。届け出制でなくても、行政もいろいろと調査をして欲しいのです。そして、行政から住民への広報をもっと積極的にしていく必要があるのではないかと思います。

●山間地は人が少ないし、日中は老人ばかりなので、日常の近所づきあいを大切にして、助け合う気持ちを作ることが大切だ。（日野町、女性、60代）

●美しかった自然が変わっても人間の心の中にある昔の思い出は、いつまでも消えることはない。（日野町、男性、70代）

●災害はどこに発生するか分からない。お互いに助け合うことを忘れてはいけない。（日野町、男性、60代）

●日頃、対策をとっておくことが確実に効果を発揮するということが分かりました。（江府町、男性、40代）

体験談13

米子市、男性、30歳代
家族構成：本人・妻・子供２人・母の５人
住居：木造2階建家屋／一部損壊

ブロック塀の下敷きで全治6ヶ月の大ケガ。地震のことは忘れたい

●その時ブロック塀が

地震発生時、自宅には母と2人でおり、家の中で仕事をしていました。途中、トイレに行っている際に地震に遭い、ビックリしてしまい母より先に外に出ました。その時どちらに行こうか迷っている時に近隣の家の塀が倒壊し、ケガをしてしまいました。

倒壊したブロック塀は7段あり、1.5m程の高さでした。倒れたブロック塀は、ちょうど道路幅一杯で逃げ場もありませんでした。しかし、倒壊したのは片側だけで、もう片方のブロック塀は古いのですが大丈夫でした。

（現場写真を見て）一面に倒れたブロック塀の、一部抜けている部分に座った状態で、足を投げ出したままブロック塀の下敷きになっていました。ブロック塀が倒れてきても、何もできない、何も考えられない状態でした。しかし、その時の瞬間の恐怖は体験した者でなければ分からないと思います。

母が必死になって近所に助けを呼びに行きましたが、あいにく昼間で若者がいなく年寄りばかりでした。消防署にもつながらなかったようです。幸い、様子を聞きつけた若者が2人来てくれ、救出してくれました。救出後は救急車が来ないので、痛みを我慢して背負ってもらい、病院へ連れて行ってもらいました。

ケガの具合は右足の膝の半月盤・靭帯損傷、左足は膝から少し下で複雑骨折、踵が粉砕骨折・骨盤・腰が骨折しており、今年の4月いっぱい入院をしていました。現在も障害が残り、今後これ以上の身体の回復は望めそうにありません。障害の申請をしましたが、障害認定は取れませんでした。

最近では、どうにか動けるので、知人の紹介でリハビリがてらに週に４日ほど仕事に行っています。

●残った家族は・・・

発生時、子供は学校に行き、妻は用事があり出かけていました。しかし、連絡をつける方法がなく、どうする事もできませんでした。妻は隣人から私のケガのことを聞き、病院に駆けつけました。

妻は病院の付き添い、家の事、その他諸々を1人でしないといけなかったので、非常に大変のようでした。

当日の夜以降、残った家族（母・子供2人）は余震等が怖い為に隣人のお宅の庭に2泊させて貰い、精神的にとても助かりました。

●何もしていなかった防災対策

家具の置いてある向きが良かったのか倒れる事はなく、引き戸だったために中身も無事でした。隣りの家は開き戸だったためか壊れたそうです。

●家具が倒れた時のことを考えて、赤ちゃん、子供などは寝かせる場所を注意し習慣付けておきたい。（江府町、男性、50代）
●個人が相談できる窓口を役場に真っ先に設けるようにして欲しい。（江府町、女性、40代）
●墓の石塔は飾り気の少ない四角で竿が短い物が安定していると思った。また、石垣はコンクリートで練り積すること。（江府町、男性、60代）
●被害の記録写真、復興状況も記録として残しておくこと。（江府町、男性、60代）
●日頃から災害に備えて、いろいろと準備、勉強して災害に対する心を強く持っていけばと思います。（溝口町、男性、

防災対策は何もしていませんでした。

●身体の補償は

市からは義援金としては貰いましたが、ケガに対しての補償は何もありません。老人介護保険料を払っているが、怪我人が出てお金がかかるので、払えるようになるまで一時停止のお願いをしましたが断られました。事情を説明しても半壊以上の罹災証明がないといけないと言われました。

家に対しての補償が出たのだから、体に対してももう少し出ないかと思います。

何かの支援や制度があれば、生活面でもかなり助かりますが・・・。

家屋の損壊はお金を出せば直るが、身体のケガはお金を出しても治りません。また、入院に際しての費用は、労災にならないので医療費が高額になります。正直言うと、これからの生活のことを考えると、とてもやりきれない気持ちで一杯です。この地震に対して、誰を責めるわけにもいきません。ただ、倒れたブロック塀の家の人と補償については、現在も話し合いの最中です。

●情報収集の手段は

地域的（自治会）での防災対策への取組み等は特になく、寄り合いなどもありません。

ラジオやテレビで情報を取り入れるくらいでした。

余震の時の避難場所への指導は、特にありませんでした。自分達の決められている避難場所は距離的に遠く、避難途中に危険な場所もあるので緊急の時などは近くの場所を開放してもらうとありがたいと思います。

自分の家がこのような大変な状況になり手一杯だったので、情報などに感知する余裕がなく、他の事が何も考えられませんでした。

70代）

●忘れないで欲しい。私は新聞の切り抜き、写真を残しました。時々は家族だけでなく、友達、近所の方、みんなで話し合うといいですね。（溝口町）

●家族との連絡手段として携帯電話は使えない。（溝口町、男性、50代）

●一家の中で耐震構造の安心できる一室を平素から作っておくこと。（溝口町、男性、70代）

●各地の避難所は耐震構造の確実な施設にして欲しい。また、災害を他人事と思わず、できることは先ず自分から実行して欲しい。（溝口町）

体験談14

米子市、女性、30歳代
家族構成：本人・夫の２人
住居：借家・鉄筋コンクリート造アパート／一部損壊

幼い頃の地震体験が、この地震でＰＴＳＤ（心的外傷後ストレス障害）として

●鳥取で地震なんて

地震発生時は仕事中でした。最初、「あれ？何だろう」と思ったとたん、遊園地にある大きな船の形をした乗り物のようにだんだん揺れがひどくなり、「これは凄いことが起きたな」と直感しました。何秒か分かりませんが、揺れがひどくなっていくと同時に、上の電灯も一緒になって揺れたので、「このままだと落ちてくる。危ないな」ということで外に逃げました。たまたま今、仕事の関係で鳥取県に住んでいますが、「鳥取県はそんなことはないはずだ」と自分の中で信じようとしていました。

テレビを見て震度６の大きな地震だということを知りました。また、家が倒壊した為、内浜線が通行止めになっていること。ちょうど大根島から境港に帰って来られた方がいて「全滅だ」とおっしゃっていたので、「たぶん、もう家はないだろう」と半分覚悟して夕方仕事を終えて家に帰りました。

ところが、帰ってみると建物があったので「あまり良いアパートではないが、意外と強かったんだな」という感じでした。家の中に入ってみると、この間の芸予地震の時は完全に倒れておりましたが、角度と揺れ方の問題かタンスや冷蔵庫といったものは倒れておりませんでした。ただし、中身は全部出ておりました。タンスの上に置いていた空箱やぬいぐるみなど軽い物の中には５～６ｍぐらい飛んでいるものがありました。携帯電話を持っていないので電話自体が埋もれてしまい、どこにあるか分からないので両親に電話をしようと思っても、とてもそのような状況ではなく、とりあえず通路を作るだけで夜中までかかりました。

私だけ先に帰って来たので、いったん中に入ってはみたものの、その後、余震があったので怖くて主人が帰って来るまで外の公園で待っていました。当日はずっと余震でした。時折、震度３か４くらいの大きな地震があり、とにかく必死でしたので細かい破損状況は確認しませんでした。

次の日が土曜日だったので、とりあえず何とかして寝るだけの場所を確保しましたが、怖くてほとんど眠れませんでした。

●油断していた防災準備

水圧が下がって水が出なかったので電話をしたら、「皆さんがお水を使うので制限しています」ということでした。お水はチョロチョロ状態。もちろん、ガスも怖かったので４日間ぐらいは一切使いませんでした。幸い、近くのスーパーが比較的すぐ開いたので惣菜やお弁当を買って３～４日は過ごしました。お風呂は季節が良かったということもあったので、極端に言えば１～２日お風呂に入らなくてもいいということで、はっきりとは覚えておりませんが３～４日は入りませんでした。

本当のことを言うと「鳥取県には来ないだろう」と胸の中のどこかにありました。それは、「来てほしくない」という強い思いの現れだったかもし

●ガスはもちろん電気もブレーカーを下ろすことを学びました。（溝口町、女性、60代）
●行政の説明責任、職員の意識改革、意志統一が絶対必要です。（溝口町、男性、40代）
●非常用の常備品として食糧、水をストックしておくこと。（溝口町、男性、50代）

れません。この時期は備えが少しいい加減になっていました。こちらに来て10年近く経ちますが、最初の頃は神戸の地震があったこともあって、お水を入れたタンクをお風呂の所に置き、古くなったら定期的に入れ換える等こまめにやっていました。また、カンパンや懐中電灯や下着やビニール袋やカッパなどちょっとした物を入れた防災袋も持っていましたが、今回は使いませんでした。何年か前までは比較的すぐ取れる場所にこの袋を置いていたのですが、あまり地震がないので奥の方にしまっていました。ただ、今では懐中電灯とラジオ、そして生理用品は枕元に必ず置いております。今回は、ラジオがかなり重宝し、色々な情報を入手しました。

●心のケアが必要なＰＴＳＤ

地震が怖いということで夜眠れなかったり、時折忘れた頃に余震があるので、これを機に電気をつけたままでないと眠れなくなってしまい、今も電気をつけて寝ています。12月くらいまでは自分でも「一時的にそういうのがあるから」と思って様子を見ていたのですが、12月を過ぎても治らないので県の相談窓口の方に電話をしました。そうしたところ、鳥取医大に専門の先生がいると教えて下さり、そちらに相談して今は回復しております。

地震が起きて３日か４日くらいした頃だったでしょうか、小さい時に大地震に遭ったという怖い記憶が甦ってきました。父親が一時行方不明だったために、どうしようもない恐怖感や「お父さん、どこに行ったんだろう」という不安感。それから、当時の地震のことが甦ってきました。とにかく、頭では「そんなに大きい地震が続けてくるはずがない。大丈夫だ」と分かっていても、ちょっとした余震で足がガクガク、心臓がドキドキしてどうしようもない状況でした。だからといって、社会生活自体にはそんなに支障はないので普通に仕事に行ったり、生活をしていました。１月ぐらいまでは結構、余震があったので、仕事中に余震があると、「あー」という感じでパニックになってしまうことが続きました。

●理解されない心の病

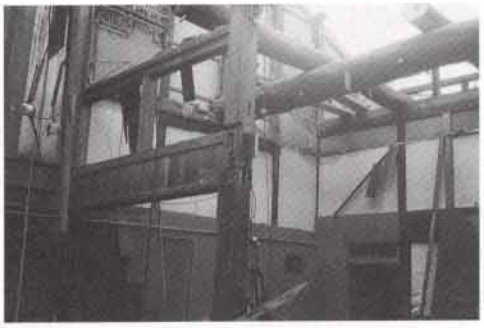
先生に色々伺ったところ、子供も勿論そうですが、阪神・淡路大震災を経験された方は大人の方でも症状が起きるということをおっしゃっておりました。しかし、大人になると、このようなことをなかなか言えないと思います。一応、「保健所で自由に相談できますよ」と言われたのですが、結局、私も保健所には電話しておりません。また、「相談があれば保健所に」ということですが、どのような形で取り組んでいらっしゃるのか分かりません。

それから、職場で「まだそんなことを言ってるの」という感じで理解されないことが一番辛かったです。そんな簡単にパッとよくなるものではありません。私はたまたま神戸に知り合いの方がいたので相談をしたら、「大人でも10年経って治らない方もいれば、10年経って急に嘘のように大丈夫な人もいる。だから、周りの人が何を言っても気にしなくて大丈夫だよ」ということを神戸の経験された方々に言われて、「自分はこれでもいいんだ」と思えるようになりました。

このような精神的なことは、風邪のように薬を飲んだらすぐパッと治るというものではないということを皆さんが理解されていないように思います。それまでは普通だったのですが、一人で家にいるのが怖いので未だに夫と時間を合わせて帰るようにしております。このようなことも「まだそんなことをしているの？」と言われますが、大きな事件やこのような自然災害が起きた時の人々の精神的な面は簡単ではない、ということを啓発活動して頂きたいと強く思います。

体験談15

米子市、男性、70歳代
家族構成：本人・妻の2人
住居：木造2階建家屋／全壊



神戸地震で被災し、安心だと思った米子でも、また被災

●もしも慌てて降りていたら

地震発生時は、2階の廊下に椅子を置いてお酒を飲みながらテープを聴いている最中でした。床柱が左右に５～10cm程の横揺れがしましたが、揺れている最中、騒いでも仕方ないのでもうじきおさまるだろうと思いジッとしていました。すると、積んでいたテープが倒れたり、床の間に飾ってあった皿がひっくり返りました。階段の上がり口に土壁があったのですが、それも崩れ落ちました。あわてて階下に降りていたら、壁が頭上に落ちてきていただろうと思うので、ジッとしていて良かったと思いました。

今回の地震は揺れの向きが幸いしたのか、我が家は潰れませんでした。今は空き地ですが、隣りには震災前は建物がありましたが、この震災で倒れました。隣家の土地に私の家がのっかかったようになり樋を壊したような形になりました。市の審査も半壊という事でした。

●阪神大震災では・・・

神戸の地震はキツイ上下の突き上げの直下型でした。周辺のありとあらゆる物が全て倒れ、飛んでいました。神戸で住んでいたマンションでは、基礎が30ｃｍ位引っ張られてしまいました。しかし、建物はそのままに残っていたので、修理に長い期間かかりました。

地震後の避難時に、妻は足場が悪くてこけてしまい、本箱の下敷きになり腰の骨を折ってしまいました。ですから、避難も出来ず、ここで死ぬのではないかと思ったほどでした。震災後2日目に、親戚が迎えにきてくれて米子の家へ帰ってきました。

“地震は神戸でこりごり。米子なら大丈夫だろう”と思って帰ってきた途端の今回の地震だったので、大変驚きました。

●防災の準備について

2度の震災体験後の準備としては、非常持ち出し袋や通帳などは準備していますが、特別な物はしていません。阪神大震災では、家の中の物は全て倒れてしまった為、非常持ち出し袋を作っていても取り出す事が出来ないような状態でした。

それよりも、どこに逃げようかという位のことしか考えていません。

●妻の安否が

地震後、建物の被害や火災の事は頭に入りませんでした。一番気になったのは、外出中（お寺に行っていた）の妻の安否でした。階下に降り最初にした事は、外出先の妻に連絡をとるために電話帳で番号を探したことです。気が動転していてなかなか探せませんでした。やっと電話を掛けるとタクシーで帰ったとの事で無事を確認した時やっと安心しました。

お寺では、蓮華が倒れたり、木札が落ちてきた為、妻は怖くて外に飛び出したそうです。墓石も

倒れ、道を塞いでいたそうです。

●周辺の被害は

自宅周辺の被害はあまりなかったようです。

我が家は古い家屋であり、余震が怖い為に近所の親戚の家に1ヶ月程お世話になりました。

被害状況は、家の壁の破損、蔵の壁の破損、皿がひっくり返ったりした程度でした。自宅に帰ってからでも、かなり大きな揺れがありました。

●行政への要望として

地震の直後（当日）は、市からの避難勧告などはありませんでした。あくる日には自治会の役員が被害の調査と、次に大きい地震があった時の避難場所の指示がありました。それまでは、正式な避難の場所はマップが来ていたが、あまり詳しく見ていませんでした。

壊した家屋の方に、風呂や台所などが全部あったので、これから年もとるので、残った家屋の方をバリアフリーに建て増ししようと計画していました。しかし、続けて建てると既存の建物も全部サイディングで囲わなければ許可が下りません。その上、準防火区域の関係で、棟を続けて建てると新・旧の建物が同じ建物とみられるので、許可が出ないのです。だからと言って、棟を続けて建てないわけにもいかず、家を壊すと言う事もできません。

地震がなければ、少々歪んでいても生活できていたところですので、そこを許可して欲しいと思うのです。増築の許可が出て建物が建つまでは、片付けるという段階にはなりません。現在もなお、万全と言う生活環境の形にはなっていないのですから・・・。

神戸に比べれば、鳥取の行政・関係機関の対応は早かったように思います。余震の関係等での早い情報の伝達は特に必要だと思います。

●地域での防災・被害

地域住民との防災関係での会合は、自治会の役員がすぐに集まっていろいろ相談をされたようです。私は班長でしたので、避難場所を把握するようにと言って回りました。ビニールシートのいるところは配ってもらいました。

地域での被害状況としては、屋根瓦の被害は近所では1件でした。我が家では壁の隅の方が力がかかるのか、割れていますが日常生活には特に支障ありませんでした。

地域にも拡声器が付いており、周辺に伝えるのには効果的だと思います。

横浜の方では行政の方が耐震構造にするにはどういう風にしたらいいのかとか、費用がどのくらいかを調べていたようです。古い家の者としては、その様な調査をしてもらいたいと希望します。

娘が東伯の方にいますが、そこは有線が流れており、テレビよりも情報が早く入ってきたそうです。災害時は公衆電話でなければ通じないので、まず財布を持って公衆電話に走ったそうです。しかし、近頃は公衆電話が撤去されている為に、いざ災害の時には公衆電話がないという状態になります。

●今後に備えて

家の家具の転倒防止でタンスに突っ張りでもしておけばよかったと思いました。大きな物は特に怖かったです。倒れるものは倒れないような対策をしておく事が重要だと思います。我が家でも現在は大きい戸棚は止めています。

ドアの前後には物をあまり置かないようにしなければ、逃げようにもドアが開かなくて出られない状態になります。今になって思うのは、懐中電灯はもちろんのこと、のこぎりは手元に置いておかなければいけないと思います。家が潰れて、木と木の間に入った時に脱出しようと思ったらのこぎりがなければいけないからです。

体験談16

米子市、男性、50歳代
家族構成：本人・妻・子供の3人
住居：木造2階建家屋／全壊

家は全壊、ビニールシートが4枚で5万円の悪質業者に怒り

●跳ねた様子のピアノ・・・

仕事場で食事を終えると、グラグラと揺れ、最初は普通の地震だと思っていました。しかし、次第に揺れが上下にひどく大きくなり、「こりゃ半端な地震じゃない」と直感しました。実際に通常の地震よりも長かったのですが、体感的にも大変長く揺れたように感じました。

鳥取県には大地震は来ないものという思いがあったので、まさか鳥取県の西部で起きているとは思いませんでした。だから「県外なら相当に大きな地震だな」と思っていました。すぐにテレビのニュースで鳥取県の地震と分かり、家が心配になり急いで帰ろうとしましたが、近くを見ると、あまり被害がなかったようなので自宅も大丈夫だろうと思い、すぐには帰りませんでした。そのうち妻から電話があり、自宅がひどい状態だと聞かされて急いで帰りました。

家に帰ると入り口は、いつもとさほど変わらず、意外に大したことはないなという感じでした。しかし、家の中に入ってみると、鏡・冷蔵庫はもちろん、あの重いピアノでさえ、いったん持ち上がったらしく、大きなものが左右に大きく動いていました。縁側のガラスにいたっては、留守の際に鍵を掛けていたのに、鍵がかかったままの状態で全部外れて庭のほうに引っくり返り、割れていました。

●我が家の全壊の程度

家は床下に潜ってみると土台が離れ、基礎もひびが入り、家も傾いていました。どのように修理をすればいいか悩んで、震災2日後にとり合えず応急処置にとビニールシートを買いに行きました。しかし、どこも売り切れで在庫がありませんでした。仕方がないので、神戸から来た業者から高額（青いシート4枚を5万円）で買いました。後で「ビニールシートが必要なら言って下さい」と自治会から連絡があり、市から無料配布がありました。こういう弱いところにつけ込んで、あちこちに悪質業者が来ていたと近所からも話を聞きました。市や行政からも悪質業者に関する連絡がありましたが、情報・対応が大変遅かったように思います。幸い、雨が降らなかったので、この程度の被害で済んでいますが、もし雨でも降っていたら・・・。もっと市や行政の対応を早くして欲しいと思います。

我が家は全壊と審査されましたが、今までの認識として全壊と言えば家がペシャンコになり、絶対に住めないというイメージがあり、一部損壊、半壊程度かと思い、申請の為に妻を市役所に行かせました。すると、市の検査ですぐに半壊の申請が出ました。その後、11月初旬に業者に見てもらうと、「主要鋼材が壊れているから全壊で再申請をした方がいい」という指導を受けました。そして、改めて市の検査をしてもらい全壊の申請を貰いました。

今回の地震は、天災だから何も補償が出ないと思っていました。しかし、片山知事のお陰で補助金が出ました。いくらお金がなくても、どこかから借りてでも修繕はしなければいけなかったので大変助かりました。

●住宅再建の矛盾

家を建て替える場合、半壊・全壊にかかわらず300万円の補助が出ます。しかし、補修する場合は150万円の補償になります。

私もある程度若ければ、家を建て替えたいと思います。しかし、そうなれば負担がかなりかかります。まして、今のローンを残していたら、ダブルローンになってしまいます。ですから、家は少々の事なら我慢できるのであまり手を掛けないで、基礎の方を重点的に頑丈にしてもらいました。また地震が来ても、基礎をある程度頑丈にしていれば被害が少なくて済むのです。

県や市町村の住宅支援の対応は大変助かりありがたいと思っています。今回の支援策が前例となる以上、問題点を検討していただきたいと思います。

●自治会役員も被災者

今、実際に地震を体験してみて感じたことは、自治会役員も被災者なのです。他の家などに構っている余裕がないのです。

自治会で消防訓練をしても、通常残っているのは女性・子供・年寄りです。自治会単位で話をして一般的な机上論でなく、実務的なものをしていかなければいけません。

●今回の教訓

今回の地震で教訓になった事と言えば、ガスの元栓を閉める事を気に掛けて行うようになりました。横になって腕枕をしてテレビを見ると、余計に震動を感じて「また大きな地震が来ないか」という恐怖心や不安がつのります。余震があればガスの元栓をすぐに閉めてビクビクしています。

実際に震災が起きれば誰も助けてくれません。常に部屋の上の方に物を置かないという事をきちんとやっておかないといけません。我が家も震災後は2階になるべく重たい物は置かないようにしました。2階が重たくなれば、家は柱でもっているので余計に揺れがひどくなるのです。この事は、絶えずみなさんも心に留めておいて欲しいと思います。

●地震の記憶を記録に残そう

今までは、鳥取県と言えば、噴火もない、海からの津波もない、台風も直撃はめったにない、地震もないからいい所だと思っていました。しかし、日本列島はどこに地震が起きてもおかしくないと言うことが、実際に体験して初めて分かりました。体験するまでは、あくまでも他人事にしか思っていませんでした。神戸の時も大変だと思いましたが、鳥取県に来なくて、米子で生まれ育ってよかったと言う感じでした。しかし、今回のことから、本当にいつどこで起きてもおかしくないということを痛感しました。

震災は体験した者でなければ分からないので、写真や資料を残して、絶えず地震に対する意識を持たせるような活動もしなければいけないと思います。

しかし、災害はまた鳥取県にも来るかもしれません。ですから、体験を通じて気持ち的に自分の中、いろんな人の記憶・記録の中に留めておいて欲しいのです。